

## 遊戯療法による人格の成長

古 瀬 謹 一

### 1

遊戯療法 (Play therapy) は、遊びを媒体として子どもに対して行なわれる心理療法である。遊びは、子どもにとって自己表現の自然の媒体であり、子どもは遊びの中に、その蓄積された緊張感・欲求不満・不安定感・攻撃性・恐怖・当惑・混乱などを外部に表現することができる。したがって、遊びを媒介にして、子どもの葛藤や緊張、不安や敵意などの感情を自由に表現できるようにしてやり、その奥に埋もれてしまっている子ども自身の真の力、可能性を発揮できるように心理治療を行なうのが遊戯療法である。

遊戯療法は、精神分析療法を子どもに適用しようとする試みから生まれてきたと考えられる。

クライン (Klein, M.) は、遊びを子どもの無意識の象徴と考えて、成人に対する同じ原理で遊びの分析的解釈を施した。クラインは、子どもの遊戯活動は、それに伴っている言語化を包含しており、成人の自由連想の場合と同じ原理に基く解釈の仕方で解釈できるとし、遊戯を分析し、解釈することにより、子どものもっとも深い抑圧された経験

および定着に接することが可能であり、それによって、子どもの発達の上に根本的な影響を与えることができる<sup>(1)</sup>した。

アンナ・フロイド (Freud, A) は、子どもは、分析者へ安全な感情転位を起すことが困難であり、子どもの超自我が未完成であるという二つの理由から、子どもは成人と異り、そのために成人に施すと同様な純粹な精神分析の方法を適用することはできないと主張し、成人の精神分析治療の基本的な技法である「自由連想法」とは異った「一つの新しい技法 (a new technique)」を用いることが必要であるとし、その技法として遊戯療法をあげている。<sup>(2)</sup>

しかしこれら精神分析的立場の遊戯療法は、ドルフマン (Dorfman, E.) も指摘しているように、治療の中心として遊戯を利用するのではなく、むしろ分析という本来の仕事への準備としての感が強いのであり、事実クラインは自己の方法を、「遊戯分析 (play analysis)」と呼んでいる。

ランク (Rank, O) は、フロイト (Freud, S.) の古典的精神分析を批判して、患者の過去の外傷的経験よりも現在の治療者と患者の直接の関係を重視したが、この考えから、タフト (Taft, J.)、アレン (Allen, F. H.) などの関係療法 (relationship therapy) と名づけられる方法が発展した。つまり、分析派の如く、遊戯の象徴化を重視し内容を解釈して、子どもの無意識の世界を洞察したりするのではなく、遊びの場面に持ち込まれる治療者と子どもの動机的関係より、子どもが自己の責任を受け容れ自発性を生かすように導くという行き方であり、子どもは自己自身の中に治療力があり、自己自身で成長するという自発性と自己実現を強調している。しかし、この関係療法が、子どもの自己成長力を認めながらも、「治療家は治療することを考えているのであって、そのためには患者の持っている能力を生かしてやらねばならぬ。すなわち、患者を助けて、彼が自己を変えるか否かを自覚できるように指導する。」とアレンが論じているように、治療者と子どもとの動机的感情関係を巧みに導く、つまり、子どもの自己成長力を、あ

る程度、治療者によってその力が指導されねばならないという方法である。これに対して、徹底的に子どもの自己生長、自己実現の力の尊重を基礎としているのが、ロジャーズ(Rogers, C. R.)の心理療法原理である来談者中心療法(client centered therapy)にもとづく遊戯療法である。

この方法はアクスライン(Axline, V. M.)<sup>(9)</sup>らによって研究され、来談者中心療法にもとづくカウンセリングの発展とともに、子どもの心理療法の一分野として大きく注目されている。しかば、来談者中心にもとづく遊戯療法とはいかなるものであるか。それを略述して見る。

## 2

来談者中心による遊戯療法は、先にも述べたように、いわば、ロジャーズの成人に対する来談者中心療法の子どもへの適用であるが故に、この立場を概感するためには、まずロジャーズの心理療法の基礎概念に触れておかねばならない。

ロジャーズらによって提唱されている来談者中心療法では、その基本的仮説によれば、人間を次のようにとらえている。<sup>(6)</sup>

個人は、自己自身、及び自分を不満足にしたり、不安にしたり、もしくは苦痛にしたりしているような自己の生活の諸要素を理解し、自己実現や成熟を目指して発展して行こうとする資質、あるいは傾向を自己自身に潜在的に持っている。つまり人間は誰でも、成長して行こうとする資質、自己決定して行こうとする資質を、その持ちまえの能力(potentiality)として有しているという仮説を立てているのである。

こういう個人の資質が解放され、治療もしくは個人の成長がより促進されるためには、次の諸条件が必要であるという。<sup>(n)</sup>

### 1 一致 (congruence)

治療者が、あるがまゝにあるとき、すなわち、クライエントと人間関係を持っている際に、純粹 (genuine) であり、とりつくりたり、仮面をかぶったりしないで、その瞬間に自分の中に流れている感情や態度をつつみ隠そうとはしないときに、個人の変化が助長され、成長が促進される。つまり一致とは、治療関係において治療者が、その瞬間に自分自身が経験しているものは何かということを、十分に正確に気づくことであり、自我と経験とが一致する意味である。

### 2 無条件的な好意 (unconditional positive regard)

治療者が、クライエントに対して暖かく好意的で受容的な態度を経験しているとき、これがクライエントの人格転換を促すというのである。暖かい好意を持ち受容するということは、治療者がその瞬間にクライエントの中に動いている感情がどんなものであっても——恐れ、混乱、苦痛、誇り、怒り、憎しみ、愛、勇気、畏敬——クライエントを心から受け容れるということである。つまりこれはクライエントが、クライエント自身の感情や経験を持つことを許しているのであり、このことはクライエントを一人の独立した人間として、その全人格を受容し尊重しているのである。いわば治療者が、クライエントがある行動をしたときにだけ受け容れ、他の行動をしたときには非難したり、また、治療者自身の尺度や規準によってクライエントの行動に条件をつけたり、評価したりしないというクライエントに対する徹底した尊重であり、好意を持つことを意味している。

### 3 共感的理解 (empathic understanding)

クライエントがその瞬間に経験している感情や主体的な意味 (personal meaning) を治療者が感じているとき、さらにそれをクライエントにうまく伝えることができるとき、この第三の条件が成立する。

これは、治療者がクライエント自身の観点から、クライエントやクライエントの感情や行動を理解したり、クライエントの内的世界に入り込み、それを確なものと理解する——そしてなおクライエントを受容している——ならば、共感的理解ができていたのである。つまり治療者が、治療者自身の独立した主体性を矢わないで、クライエントの内的世界に生ずるその瞬間々々の経験を、クライエントが見たまふ、また感じたまふを理解するときクライエントに転換が生じる。クライエントは、彼自身がどのように感じ、またどのように思っているかを、分析や判断をしようとして誰かが理解してくれるとき、その雰囲気の中で成長することができるのであり、すなわち、この第三の条件こそ、治療における最も重要な条件であるとする。

以上の三条件がクライエントに満されるとき、クライエントは他人からの指示や激励を仰がなくても、自己の持っている持ちまへの力 (Potentiality) を十分機能的に使うことができるようになり、自己実現、自己決定の道が開かれ成長して行く。結局、個々の人間が持っている成長し、健全になり、適応しようとしているこういう個人の成長の力を信頼し、その力を解放し前進させるために役立たせるのが心理療法であるとする。

### 3

さて、ロジャーズの来談者中心療法は、アクスラインらによって子どもの遊戯療法にとり入れられ、非指示的遊戯療法、或は児童中心遊戯療法が提唱されるに至った。この遊戯療法の基本となっている人間観はロジャーズによるこ

とは勿論である。すなわち、各個人の内部には自己実現をなしとげようとして、絶え間ない努力を続けている強い力があり、個人の行動は、完全に自己を実現しようとする動因によって引き起こされる。また、いわゆる個人の不適応という行動も、自己実現の動因を表面化させるに必要な諸条件が否定されたときに起こり、その否定は、個人の内的自己概念が十分に表面化できず、歪曲した自己実現として現われたものとする。したがって、この動因が外部の圧力で阻害されたときでも、自己実現をなそうとするこの力は、そこで成長が止まったのでなく、そこに起こる欲求不満や緊張のために情力を増すが、絶え間ない成長への努力が続けられているとする。

もしここに、自己実現が充分にできない個人がいるならば、その個人をして、その緊張や欲求不満から解放してやり、成長しよう、成熟しよう、充足しようとして絶え間ない努力を続けているその内部にある力を実現せしめるために援助を与える。つまり自己実現のために必要な成長の場であり機会が治療なのであり、それがもつともふさわしい条件のもとで、自己実現ができない子どもの成長や自己実現に役立つものが遊戯療法であるとする。

そこでアクスラインは、児童中心遊戯療法の原理として次の八項目をあげる。<sup>(9)</sup>

- 1 治療者はまず子どもとの暖かい親密な人間関係をつくる。
- 2 治療者は子どもをあるがままに受け容れる。
- 3 治療者は子どもが自分の気持完全をに自由に表現できるように雰囲気をつくり出す。
- 4 治療者は子どもが表現している気持を的確に認知し、子どもが自分の行動を洞察できるように反射してやる。
- 5 治療者は、子どもは適当な条件さえ与えられれば自分の問題を自分で解決し得る能力を持っていることを尊重し、子どもの自発性を認める。

- 6 治療者は子どもの行動や会話を先導しないで、むしろ子どもの先導に従う。

7 治療者は、治療は徐々に進行する過程であるということをよく認識し、治療をせかせせない。

8 治療者は治療を現実と結びつけて、子どもにその関係における自己の責任感を喚起させるための制限を設ける。右の八原則のなかで、1から7まではすでに述べたロジャーズの人格転換の三つの基本的条件より解釈し得るが、たゞ最後の8については若干の説明を加える。

遊戯治療においては、子どもの自由な自発的活動を重視し、治療者は何ら積極的に力を加えるということをしないのが原則である。しかし子どもに自由にさせるといっても、無制限な自由ではなくある程度の制限がなければ治療は成り立たない。しかしこの制限は子どもに圧力をかけるものではなく、この制限によって、子どもは自分自身や治療者や遊戯治療室に対する自分の責任を思い起こし、同時に、安定した気持で自由に安全に遊ぶことができるのである。また、この制限は治療関係を現実と結びつけており、子どもの責任ある生活態度ができてゆく。そこで遊戯療法の制限には次のものが設定される。

「時間の制限」 治療者との話しあいでは治療時間が決められると、子どもはこれを守らねばならない。

「遊具の制限」 治療室の遊具をこわしたり、窓にものを投げつけてガラスをこわそうとしたりする子どもに対して、子ども内部の抑圧された気持を発散させるためには破壊も必要であるが、この際、治療室が大きな損害を受けたり周囲の者が迷惑するとかいう場合には、そのような子どもの気持が解放できるにふさわしい遊具に方向を向けさせるのである。

「治療者に対する攻撃の制限」 治療者に対する攻撃はどんなものであっても、たゞちに止めなければならぬ。治療関係が成立するためには、子どもと治療者が、お互にまじめに尊敬しあうことからはじまらなければならない。しかしながら、もしも子どもが治療者に対して攻撃的な行動を引き起こした場合、治療者はその子どもを受容しにく

くなったり、子どもは自分を援助してくれるたゞ一人の人との関係において、罪悪感や不安感を起すかもしれない。したがってこういった行為は、はっきりと禁止しなければならない。

「危険をともしう行動の制限」 子どもが安全に遊ぶためには、治療者が子どもを見守ることのできる限界がある。その限界内での危険をともしう行動を制限することは勿論であるが、その限界を越えようとする行動についても制限しなければならない。

以上、アクスラインの提唱する児童中心遊戯療法の概略を述べて来たが、次に遊戯療法の実例を示して遊戯療法による人格の成長について考察してみたい。

## 4

ここに掲げる事例は、筆者自身が大阪府T市立教育研究所において昭和四十年五月より八月まで、十五回に亘って実施した遊戯療法の記録の抜萃である。

クライエント S・Y (昭和34年8月27日生 5才)

S・Yは極度の言語遅滞があり、五十音の発音もア・イ・ウ・エ・オ・カ・ク・コ・チ・ツ・テ・ハ・フ・マ・ンの音以外は正確に発音できず、語彙数も極めて少ない。しかも精薄児でI・Qは推定40。筆者が最初に本児に会ったのは昭和40年2月20日、同所内の「ことばの学習教室」(言語障害児治療室)入級選抜のための知能検査のときであったが、そのときは付添いの家族からはなれることができず、いくらなだめても、どうしても満足に検査が受けられず、測定不能であった。さらに全体的に不活発で生氣がなく、「不活発、適応性に乏しく、慣れないところでは家族



との分離不安のため、充分行動することができない」という問題があった。したがって、ことばの問題よりも、まず適応性等の性格問題について治療する必要がある、親の希望により遊戲療法を実施した。

なお、本児の家族構成は、父（31才） 会社員、母（27才）、姉（7才）の四大家族であり、近くに母親の実家がある。

治療の過程は次の通りである。なお、一回の治療時間は五十分とした。

また、治療室に用意されている遊具は、電池式電話・トレンセット・動力式ジェット機・消防自動車・パトカー・木製電車・積木遊び・組板遊び・人形・動物ぬいぐるみ・乳母車・まぐと遊びと家具・ボーリング・刀・ピストル・カーボーイハット・卓上ピアノ・パトミントンセット・黒板・計数器・木琴・ねん土・絵本などである。親に対するカウンセリングは実施できなかった。したがって、親との話し合いは、本児の家庭その他の情況報告が主であった。

# 第一回 5月6日

母親と離れて一人で治療室に入ることができず、母親と一緒に入室する。遊具には興味を示めすが指さすだけで触れようとしない。ときどき治療者（以下thと略す）の方を見てニヤリと笑う。ジェット機を母親にとらせ、壊われているところを母親になおさせる。thの方は見向きもしない。次に電車をとり出し、窓を母親とのぞき合い、thには顔も向けず専ら母親との関係が続く。約10分後、thが電車遊びに参加を試みたところthの参加を許す。その後約5分、母親に子どもから離れてもらい室の隅で待ってもらう。母親は同一室内にいるが一応母親との分離に成功する。thと電車の窓をのぞき合い、顔が合うと声を立てて笑う。パトカーや消防を「ウーウー」と言いながら走らせる。次に絵

本をとりきと共に見る。また電車をする。終了を告げるとすぐ母親のそばにかけよる。室から出るときthが「握手をしよう」と手を出すと、S・Yは左手を出しthと手が触れ合うとすぐひっこめる。thが遊具を片付けているのをドアのところに立って見ているので、もう一度「握手しよう」と手を出すと左手を出して笑う。

## 第2回 5月13日

父親と来所。父親に命令されて遊戯室の方に行くが途中で立ち止まる。thが後から押すように室の入口まで来たがそこからは室内に入ろうとしない。thが室に入りトレインセットを出し線路をつなぎはじめると、最初は見ていたが室に入り遊びはじめる。この遊具に対しては非常に興味を示し機関車が動かないのでthが動くようにしてやろうと手を出すと拒み熱中する。時間の約半分はこの遊具で遊び、その後は絵本を見たり、窓外を眺めたり、前回の電車をいったり、パトカーを走らせたりする。終了を告げると待ってたとばかりに室より出て父親のところへ行く。この日から一人で室に入れるようになる。

## 第3回 5月20日

いやがらずに進んで遊戯室に入る。先ずシロフォンを出して来るがすぐピストルを持つ。ピストルもすぐ手放しトレインセットで遊ぶ。線路を円形につなぎ、機関車を大分上手に線路にのせるようになる。機関車が走り出すと線路をまたいで「トンネル」をして喜んだり、まゝごとの小さなブランコを線路わきにおき「えち、えち（駄のこと）」といってそこへ機関車が来ると機関車を抑えて止まる。まゝごとセットを出していらう。終了時にthが「さあ片付けよう」というと、たゞ遊具を箱へ入れるだけがthと協力ができる。

母親の話では、最近は近所の子ともよく遊ぶようになり、いたずらもするようになって来たとのことである。

# 第五回 5月27日

進んで遊戯室に入る。数に興味を示し計数器で遊ぶ。ボーリングゲームやトレインセットなど遊具を室一杯にひろげる。パトカーを動かしたhの足が邪魔だと怒ったり、thの股をくぐってパトカーを押す。また、ジェット機を持ってthの方へ「ブーン」と持って来たり、電話遊びをする。終了を告げると不服そうな顔をして後片けもなかなかしない。促すとthを手伝う。帰るとき握手を待ちかねたようにする。左手を出し握手して笑う。

# 第五回 6月2日

電話や刀・ピストルで遊ぶがどの遊びも持続性がなくすぐ飽きてしまう。終了しても後片付けもせず退室してしまう。行動は活発になって来ている。

# 第六回 6月10日

ことばの学習室へ連れて行く。母親と同室。場所が変わるとどうしても母親と離れることがまだできない。ことばの学習教室担当者とのラポートがつきにくく、教室での遊びも母親のそばへ遊具を持って行き、母親と離れて遊ぶことができない。遊戯室へ帰って電車遊び。

# 第七回 6月18日

電車で遊ぶ。ドアをあけて電車の中へ組板を入れたり出したりする。駅を二つ作りその間を何回も往復して遊ぶ。thが「片付けようか」といえば手伝って片付けて帰える。

第八回 6月25日、 第九回 7月2日

第七回と内容は変わらず。一つの遊び（電車遊び）に熱中する。

第十回 7月6日

電車の絵を書く。前回のように電車で遊ぶ。黒板に数字を書く。2ばかり書いて「イチ、チー、タン（一、二、三のこと）」といってよろこぶ。帰るとき廊下や階段を元氣よく「イチ、チー、イチ、チー」といいながら歩く。

第十一回

電車遊び、駅を作って電車の中へ組板を入れたり出したりすることはこれまでと変りなし。

一緒に来所した父親が、九月に開設される同市立の精薄児施設「A学園」に入園させたい旨を申し出る。

第十二回 7月28日

計数器で遊び、引き続いてバトミントンをする。次はこれまでのように電車遊び。thの都合でこの日は午後一時から治療を行なったため（毎回午前十一時より実施）、室が暑く室外へ行く。階段を昇降するたびに、イチ、チー、タン」を繰り返えし元氣よし。屋外へ出ると棒を持って蝶を追いかけたり、みみずを見て蛇といったり非常に生き生き

としている。一度室に帰えるが、また外へ行きたいと階段で「イチ、チー、タン」と遊ぶ。

第十三回 8月6日

いつもの通りの仕方で電車遊びをする。ときどき電話で遊んだりするが触れる程度。

母親よりA学園入園申込みをしたところ、八月二十三日、大阪府中央児童相談所にて入園テストがあるとのことである。

第十四回 8月24日

遊戲はいつもの電車遊び。

一緒に来所した父親によれば、昨日A学園のテストを受けた。母親が付添って行ったが、母親は本児が以前当所で知能検査を受けたときや、少し不慣れな場所では母親と離れることができず、いつもなら充分できることでも何もできなくなるといふこれまでの本児の状態から、今回のテストもその点を非常に心配していた。しかし、この心配は全く杞憂に過ぎなかった。テスト場で自分の名を呼ばれると母親からすぐ離れて試験官に従うことができ、テストは三室に互って実施されたが、室から室へ移動するとき廊下で待つ母親と顔を合せても、たゞにつこり笑うだけで次の室へ入り全検査を無事終了したという。

さらに八月、半月程、郷里の九州へ連れて帰ったが、本年二月まで九州にいたときと比べて、皆が驚くぐらい元気に生き生きと活動的になった。これまでは大低家の中でごろごろしていることが多く、ほとんど一人ぼっちで友の遊びにも仲間入りすることができず、たゞ遊びをばんやりと眺めているだけであった。しかし今度は従兄達ともよく遊

び、言葉は出ないにしても元気に一緒に遊ぶことができる。このようなことは以前になかっただけに大きな進歩があったように思えるということであつた。

## 第十五回 8月31日

遊びはいつもの電車遊び。後片付も積極的にするようになり、しかもはじめの頃のようにたゞ箱へ入れるというのでなく割合整えて片付けられる。

A 学園の入園が許可された。通園の都合上、遊戯治療のため来所するのは時間的に無理であるので、本日をもって終了したいという親の希望があり、本児に対する治療は終了する。

## 5

S・Yの事例は、十五回の遊戯療法によるS・Yの人格の成長を示したものであるが、第七回目より遊戯室での遊びは電車遊びが中心で目立つ変化は見られなかったが、遊戯室外での彼の行動や態度に著しい成長が見られた。すなわち、施設入園テストにおけるS・Yの態度や行動であり、来所し遊戯室へ向うS・Yの態度や行動においてである。最初はどうしも母親と離れることができなかったS・Y、遊戯室にさえ入ることができなかったS・Y、そのような彼も第三回目から喜んで室に入れるようになり、治療者に対しても、積極的な関係が結ばれるようになったS・Y、元気に活発になってきたにもかかわらず六月十日の変った場所ではやはり母親と離れることができなかったS・Y、やがてその行動も治療が進むにしたがつて、彼が持っている彼本来の持ちまえの力 (Potentiality) を発揮する

までに成長したのである。はじめの頃、来所したときは親の後からトボトボと付いて来た彼も、親より先になりサッサと来所するようになり、表情も明るく豊になるというS・Y全体にいろいろの成長が見得るようになった。

ここで治療者としての筆者が、S・Yの遊戯療法に対して如何なる態度で係り合ったかを明きらかにしておかねばならない。治療場面での一貫した筆者の態度としては、S・Yにこのような遊びをせよとか、こうしろああしろといった指示を与えることなく、ひたすらS・Yを理解しようと勤めたことである。例えば第二回目では、治療者が何気なくトレンセットで遊び始め、そのとき「ここでこれをして遊ぼう」と誘いもしなかったし、たとえS・Yがこの遊びに入ってくれなくても遊びに入れまいままのS・Yを受け容れようという気持であった。治療者が未熟なるがゆえ、この子をもっと早く生き生きとよくならせる方法は他にないかという迷いや焦燥にとらわれたことも事実であるが、しかしこの治療過程において治療者ができることは、結局、持ちまえの力 (potentiality) が充分発揮できていないS・Yをありのままに受け容れ、尊重し、理解することであり、その自己実現は根本的にはS・Y自身にまかせるより他はなかった。したがって治療の終結がこのような型になることは、治療者にとっては予想もなかったことである。

すなわち、遊戯療法による人格の成長とは、充分に持ちまえの力を有しているにもかかわらず、その力がある要因のため充分に発揮できないでおり、自分で真の自己の姿を見失ったり隠してしまったりして種々の問題を起している子どもが、遊戯という子どもにとって最も自然な媒体により、さらに治療者との温い親密な関係の中に、真の自己の姿を発見し、持ちまえの力が充分発揮できる真の自己を回復させることである。遊戯療法とは、いわば、これらの子どもたちが自らの力で自らを成長させるための援助的な作用であるが、そこには、被治療者である子どもに対する治療者の、理解・受容・尊重がその基本的条件となっている。これらの条件が遊戯治療の場において充分満されること

により、持ちまえの力を有する子どもたちは、初めてその人格を自らの力で成長させることが可能となる。

しかしながら、さらに筆者が考えたいことは、子どもが持ちまえの力を充分に有しているが故に、その力の発揮を促進するような治療者の指示的 (directive) な働きかけが治療上可能ではないかということである。これは治療者の命令や指示などによって、治療者が自分自身で描いている好ましい態度や行動に、子どもを変えようとする試みでも駄でもない。あくまでも持ちまえの力の開発であり、子ども自身の成長を促進するための治療者の働きかけである。つまり、子どもが持っているその力を、より早く出現させるための刺激、未だ潜在しており出現することなしにとどまっている力を覚醒させる信号である。

例えば、先の事例における遊戯終了後の後片付けの場合、第三回目より後片付けの信号を送っている。殊に第四回目のときは、子どもはあまり気が進まなかったようであったが手伝わせると後片付けができる。筆者としては、後片付けさせねばならないという感情は全く持たないから、彼が後片付けをどうしてもしたがいらないならば、そのまゝ彼を受け容れたであろう。事実、第五回目では子どもは片付けずに帰っているがそれを許している。しかし、このようないわば指示的な働きかけが、片付けられるという持ちまえの力を引き起す刺激あるいは信号となり、彼の成長に役立つと考えられる。つまりかくの如き子どもの持ちまえの力に働きかける刺激あるいは信号が、子どもの行動・態度・人格の生長に有効な手だての一つとなり得るであろう。

子どもが、その持ちまえの力を有しているが故に、これらの刺激や信号が与えられるのである。子どもが、その持ちまえの力を有しているが故に、これら刺激や信号は子どもにも受容され、子どもたちの成長に促進的役割を果し得るのである。しかしこの刺激あるいは信号も、単なる指示や命令・叱責にとどまる危険性もある。だが子どもを充分受容し、尊重しておるならば、刺激や信号も正に当を得たものとなり、何かちぐはぐな違和感や恐怖感、不安感を子ども



もに与えることなく受け容れられ、持ちまえの力の開発となろう。したがって、この刺激あるいは信号ともいふべき働きかけが、遊戯治療上子どもの成長に役立つ重要な要素であると考えられる。この問題については、改めてさらに詳細に検討を試みたい。

以上、遊戯療法の概略と、資料としてS・Yの事例を論述してきたが、遊戯療法による人格の成長とは、実に、遊戯を媒体とした子ども自身による成長であり、そこに遊戯療法の根本的な特質が存在している。

- 註(1) Klien, M. : Die Psychoanalyse des Kindes. 1932. : Translation by Strahery, A. : The Psycho-analysis of Children. 1954.
- (2) Freud, A. : The Psycho-analytical Treatment of Children. 1959. (北見秀雄・佐藤紀子訳 児童分析 誠信書房 昭36 95頁)
- (3) Dorfman, E. : Play Therapy. In Rogers, C. R. : Client-Centered Therapy. 1951. (友田不二男訳 遊戯療法・集団療法 岩崎書店 昭和34 3〜4頁)
- (4) Allen, F. : Psychotherapy with Children. 1942. (黒丸正四郎訳 問題児の心理療法 みすず書房 昭和41 51頁)
- (5) Axlein, V. M. : Play therapy. 1947. (小林治夫訳 遊戯療法 岩崎書店 昭和34)
- (6) Rogers, C. R. : Psychotherapy and Personality Change. 1951. (友田不二男訳 人格転換の心理 岩崎書店 昭和37 2頁)
- (7) Rogers, C. R. : What we know about Psychotherapy-Objectively—Objectively and Subjectively. In On Becoming a Person. 1961.
- (8) 小林治夫訳 前掲書 95〜96頁